**読書ノート　その26**

2019年1月27日

**吉野源三郎「漫画 君たちはどう生きるか」（マガジンハウス、2017年8月）**

* 原書は1937年発刊、この年の7月、盧溝橋事件を契機に日・中全面戦争に突入。
* 吉野は1899-1981年、東京帝大哲学卒、治安維持法違反で逮捕歴あり、岩波書店勤務のかたわら明大教授、戦後反戦・平和の立場で発言・活動、岩波書店常務取締役、児童文学者。
* 本書は、友を裏切ったと悩むコペル君（15歳）に対し、叔父さんが「立派な人間になってほしい」とその思いを大学ノートにつづり、コペル君がそれを読みながらストーリーが展開されていく。以下、概要。
* コペル君はおじさんと一緒に行ったデパートの屋上から街行く人たちを見て「雨つぶ」みたいに見えることから、「自分も世の中を作る分子みたいなものだ」と感じる。それについて、おじさんはコペルニクス的大発見だと言い、コペルニクスの天動説から地動説への視点の転換がどれほど偉大な意味を持っているかを説き、**人生におけるものの見方も自分中心から他者中心にしなければいけない**よ言う。
* 豆腐屋の貧しい家庭に育った浦川君が、毎日のお弁当が油揚げだったりすることでいじめられている状況の中で、コペル君の友人が「いじめは許さない」といじめっ子とケンカになり、いじめっ子がやられていると、浦川君は「許してやってくれ」といじめっ子を助けた。コペル君はこの浦川君の行為を立派なことと思いおじさんに話したところ、**思ったことは口に出して伝えなければ意味がない**と諭した。
* さらにおじさんは言う。立派な大人になるということは、世間から悪く言われないとか世間から見て非の打ちどころのない人になることではない。修身の授業で習ってきたことも大切だが、もっと大事なことがある。言われたとおりに行動し、教えられたとおりに生きていくだけでは一人前の人間にはなれない。**世間の目から見た判断ではなく、自分の魂で人間の立派さが何なのかを知ることだ。心底から、立派な人間になりたいと思うこと、これが大切。良いことを良いこととし、悪いことを悪いことと判断するとき、胸からわき出てくる生き生きとした感情に貫かれていなければならない**。
* コペル君は店を手伝う浦川君を見てふとあることに思い至った。ある商品が自分の手に届くまでにどれだけ多くの人たちの労力がかかっていることかと。たとえば、粉ミルク。牛の飼育、搾乳、鉄道・船舶輸送、鉄道の建設・船舶の製造、牛乳の加工、缶の製造、缶に粉ミルクを詰める、・・・・・（人間分子の関係・網目の法則）。これをおじさんに手紙で知らせたところ、おじさんから次のような返事が来た。「大発見だね。**日本は米国の石油や豪州の羊毛がなくてはこまるし、インドや中国は日本の綿織物や雑貨が必要だ。このつながりが本当に人間らしいつながりになっていなから、国と国の利害が対立すれば戦争になってしまう。本当に人間らしい人間関係とは、お互いに好意をつくしそれを喜びとすることではないか。**」
* いじめっ子とケンカをしたコペル君の友人が、いじめっ子の兄とその仲間に取り囲まれてインネンを付けられていたが、コペル君はそれを傍観するだけで助けてあげることができなかった。自己嫌悪に陥ったコペル君は悩みに悩み不登校になった。そこへおじさんの一言が。「**過ぎたことは変えられない。そんなことは考えずに、いま自分がしなければいけないことにまっすぐ向かっていけ。二度と同じ間違いを繰り返してはいけない。**」 おじさんからの大学ノートにはこう書いてあった。「人間は自分で自分を決定する力を持っている。だから誤りを犯すこともある。と同時に、誤りから立ち直ることもできる。」
* 翌日コペル君は数日ぶりに登校し、友人に謝った。友人は「コペル君がいない学校はつまらない」と笑顔でコペル君の謝罪を受け入れた。
* 「最後に、みなさんにおたずねしたいと思います。君たちは、どう生きるか。」

コンプライアンスの観点からは、

* 「どういう会社員として生きていくか」を問うようなコンプライアンス教育も重要ではないか。
* まわりの目を気にせず、自分の魂で善悪を判断するという姿勢は、コンプライアンス違反防止のため重要ではないか。

以上